

五小の風景

No. 12

五日市小学校長 國政 直文

ひと言の大切さ

卒業証書授与式を明日に控え、6年生は最後の練習に励んでいます。5年生も在校生の代表という気持ちが高まってきています。卒業生の保護者の方々は、この6年間のいろいろなことを思い出され心中、感慨深いものがあるのではとお察しいたします。明日の卒業証書授与式、きっと素晴らしい式になると確信しています。

さて、今年度最後の「五小の風景」ということで、これからまだまだ続く子育てにとって少しでも役立てばと思い、「こんなひと言で子どものやる気は育つ」(星 一郎著)という本からいくつか子育てのヒントになりそうな文章を紹介してみます。

この本の「はじめに」の部分に、次のような文章が書いてありました。

～子どもがわがままを言う、友達にいじめられている、けんかする、ちょっとしたことでおじけづく、引っ込みじあん、自分から何もしなくて困る……。こんなとき、厳しくしつけたほうがいいのか、できるだけ叱らずにほめたほうがいいのか。私は長年、心理セラピーとして、子育てのそんな相談をたくさん受けてきました。

でも、本当を言えば、子どもは、ほめればよくなるのもでも、叱ればよくなるものでもけっしてありません。ほめるのも叱るのも、親から子への一方的な関係という意味では同じなのです。「ほめられたいからやる」あるいは、「叱られたくないからやらない」のでは、子ども自身の「やる気」にはつながらないのです。

ほめるにしろ叱るにしろ、子どもが納得し、自分からやろうとする気持ち(やる気)を引き出す言葉かけが、実は一番大事なのです。～

子どものやる気をいかに引き出すかに着目したのが、アルフレッド・アドラー博士です。アドラー心理学には、子どもの「やる気」を引き出す7つの法則があります。紙面の都合上、すべてを紹介することはできませんので、法則1を紹介します。

法則1・・・「人格」よりも「行動」をほめる

～子どもが、台所でお皿を運ぶ手伝いをしていました。そこで、あるお母さんが、「手伝ってくれていい子だね。○○ちゃん、えらいね」とほめました。ほとんどの人がこう言うだろうと思います。ところが別のお母さんは、「有難う。お母さんたすかったわ」と、言いました。どちらが子どものやる気につながるのでしょうか。最初のほめ方は、アドラー心理学でいうと賢い方法ではありません。なぜかと言うと、「いい子」とか「えらい」というのは『人格』を評価する言葉です。お手伝いという『行動』を評価したわけではありません。

人格評価されてきた子どもは、結果的には自分の意思で行動するのではなく、大人によい評価をしてもらいたくて行動するようになります。子どもが誰かにほめられたいためではなく、自分の意思で行動を起こす『やる気』を育てるのは、「やってくれて助かった」という後のほめ方です。「いい子」か「悪い子」という人格を評価するのではなく、「これをするとな人は喜ぶ」という行動そのものを認めてあげることです。子どもは、お母さんに喜んでほしい、役に立ちたい、よくやっていると認めてほしいのです。ちょっとした言葉かけの違いで、相手の気持ちを思いやる態度が育ちます。それだけでなく、「自分は誰かの役に立つことができるんだ」「自分は世の中に必要とされているんだ」という自信が生まれるのです。人格ではなく行動をほめる。これが子どもの「やる気」を引き出すアドラー心理学の第1の法則です。～

近頃、「どうせ自分はだめなんだ」「自分なんかいてもいなくてもいいんだ」という子どもの声を耳にします。こうした子どもの自尊感情は低い状態にあります。この子たちの自尊感情を高めてやらないと、常に自己否定をする子どもになってしまいます。自己否定をする子どもは、他者を理解し大切にしようとする気持ちが弱くなります。このようなことは、自分にとっても周りの人にとってもいいことではありません。この自尊感情を高める上で、大きな要素となるのが自己有用感です。つまり、「自分は人の役に立っているんだ」「自分は誰かに必要だと思われているんだ」という気持ちです。こういう気持ちを育てるためにも、法則1を今日から始められてはいかがでしょうか。

今年度1年間、本校教育に対しましてご理解ご協力いただき、誠に有難うございました。来年度もよろしくお願ひします。

